

阿倍仲麻呂をめぐりて

土屋博

阿倍仲麻呂（六九八年生れ、七七〇年歿）、性聰敏にして讀書を好み、選まれて遣唐使と爲る、時に拾六歳。吉備眞備と共に唐に留學し、姓名を晁衡てうかうと改め、唐の役人となる。天平勝寶四年（七五二年）、衛尉少卿に昇進す。遣唐大使藤原清河唐に到り、玄宗皇帝（七一二年生れ、七五六年歿）、仲麻呂をして之に接せしむ。翌年清河還るに及び仲麻呂とも與に還らんと欲するも容易には許可せられず、祕書監（圖書を掌る役所の長官）の位を受く。遂に歸國を圖り、明州に到りて唐人と別るる仲麻呂、月を望みて悵然として和歌を詠ず。乗船したる舟、暴風に遭ひ、安南に漂泊す。遂に唐に留まり、彼の地に歿せざるを得ず。

古今和歌集第九羈旅歌の冒頭には仲麻呂の詠みし歌あり。

「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」

本居宣長による口語譯（出所「古今和歌集遠鏡」）は以下の如し。

今かう空をづゝとはるかに見渡せば、あれあれ、海の上へ月がでた、あゝゝ、あの月は、故郷の三笠山へ出た月であらうかいまあ。

上記和歌については、同時代の萬葉集に記載無きこともあり、從來より偽作説あり。（土佐日記に阿倍仲麻呂に関する記載あることもあり、紀貫之（九四五年歿）作の可能性も否定出來ず。）

土佐日記より、「むかし阿倍仲麻呂といひける人は、もろこしに渡りて歸りける時に、船に乗るべき所にて、かの國人、馬のはなむけ、わかれ惜みて、かしの漢詩作りなどしける。」云々。

一方、唐詩選（明代末李攀龍編纂）には王維（七〇一年生れ、七六一年歿）の仲麻呂を送別する詩、卷四の五言排律の箇所収録せらる。

秘書晁監が日本に還るを送る 王維

（晁は姓、阿部仲麻呂の唐に於ける姓名は晁衡。）
積水極む可からず、安んぞ滄海の東を知らんや。

（海ははてしなく廣がる。茫茫たる大海の更に東に何があるかは知らず。日本に歸る海路の遼遠なるを謂ふ。）

九州何れの處か遠き、萬里空に乗ずるが若し。

（いにしへ、天地の間には唐の如き國九つありと言はれたり。晁監の歸る日本も遙かに遠く、空に乗ずるやうにして行くこととなる。）

國に向つて惟だ日を見、歸帆は但だ風に信す。

（聞けば朝日を目當てに行く由、帆をあげて風任せに行くほかなし。）
鰲身天に映じて黒く、魚眼波を射て紅なり。

（途中大海龜が黒く際立つて見ゆることも、大魚が眞紅の眼を海面に反射させることもあらむ。航海の危険なるを謂ふ。）

郷樹扶桑の外、主人孤島の中。

（故郷の木々は扶桑のあなたに生え、こなたの主人は嶋國にあり。）

別離方に異域、音信若爲てか通せん。

（一旦お別れせば、音信を通ずることも困難とならむ。惜別の情を敘す。）

仲麻呂は大詩人の李白（七〇一年生れ、七六二年歿）とも友人たり。

仲麻呂の暴風に遭ひし時、仲麻呂の死にたるものと誤解したる李白の仲麻呂を哭す感動的なる詩あるは、時代を超え、胸に迫る心地とする。

晁卿衡^{てうけいかう}を哭す 李白

(晁は氏、衡は名。卿は役職名衛尉卿の略稱。)

日本の晁卿は帝都を辭して、征帆一片蓬壺を巡る。

(日本人晁卿君は長安に別れを告げ、帆かけ舟に乗り蓬萊の島々を縫ひつつ行くもの思はれた。)

明月歸らず碧海に沈み、白雲愁色蒼梧に滿つ。

(然るに明月の如き君は青海原の底に沈み、白い雲と悲愁が海邊の空に滿ちてゐる。)

(令和三年九月三日受附)